

【特別講演2】 第6席

「葛洪の医薬観と『肘後備急方』」

京都 坂出 祥伸

東晋の葛洪（283～343）は、これまで錬丹道士として道教学者からその錬丹術が研究され、一方、『肘後備急方』の著者として、医史学者からも注意されていた。しかし、彼自身、仙道を修める者は医術をも兼ね修めるべきだと説いているように、両者は統一的連関的に考察すべきであろう。彼が八王の乱（290～306）の間、江南数州を放浪して得たものは、道教的知識ばかりでなく、医薬、疾病についても多くの知識を得たようである。そして『肘後備急方』は、その間に著わされ、『抱朴子』内外篇はさらにその後、317年ごろに著わされている。こうした経過を念頭に置いて『肘後備急方』の記載を読むと、江南特有の毒虫に対する応急治療法、あるいは使用する薬物、さらに存想、禁呪、寒食散の解散方など、『抱朴子』内篇に類似の文、共通の処方が見出せる。その量は多いとはいえないが、『肘後備急方』が梁の陶弘景その他によって増添され混乱が生ずる以前の原型を、ある程度は推測できよう。こうした問題を考察したい。